＜動向＞

関西学院における 2021 年度の多様性尊重に関する取り組み：第 9 回関学レインボーウィークを中心に

武田　丈・梶谷　優希

2020 年度は新型コロナウイルスの影響で通常の 5 月ではなく秋学期にオンラインで開催された関学レインボーウィーク（以下、KGRW）であったが、2021 年度は緊急事態宣言が発令されていたものの、通常の春学期（2021 年 5 月 17 日（月）から 21 日（金））に開催することができた。残念ながら新型コロナウイルスの影響は受けて、一部のプログラムの中止、縮小、オンラインでの実施といった対応が必要であったが、今年度もインクルーシブ・コミュニティ実現のために有意義なウィークを開催することができた。本稿では、この 2021 年度の KGRW の概要を振り返ったのち、KGRW 以外の関西学院における 2021 年度の多様性尊重にむけての活動の進捗状況を報告する。

1．KGRW2021 のプログラム内容

今年度の KGRW は、「PRIDE（プライド）」をテーマのもとに開催された（以下のチラシを参照）。この PRIDE という用語は、世界中で開催されている LGBTQ+ のパレード、たとえばニューヨークであれば「NYC Pride」、東京であれば「東京レインボープライド」といった名称に使われている。ここでの PRIDE は「誇り」という意味であり、自分が LGBTQ+ であることを恥じることなく受け入れ、堂々と自信をもって生きていこうという心意気を表している。

新型コロナウイルスの影響で例年ウィークの初日に中央芝生で開催していたオープニングイベントは残念ながら中止となってしまったが、それ以外のプログラムに関しては以下に報告するように、オンライン対応となったものもあるが、無事に実施することができた。

（制作：飯塚諒）

(1) パネル展

昨年度はオンライン開催となった教職員からキャンパスにおける多様性尊重のメッセージを掲示するパネル展は、今年度は一昨年度までと同様に、西宮上ケ原、神戸三田、西宮聖和の 3 キャン

パスで同時に実施された。これまでは、KGRW期間中の1週間だけの開催であったが、今年度はキャンパスに来る学生数が限られていることもあり、前週の月曜日（5月10日）から2週間にわたって開催された。閲覧者からは、以下のようなコメントをいただいた。

今年でKGRWもはや第9回！毎年開催して下さることに感謝します。

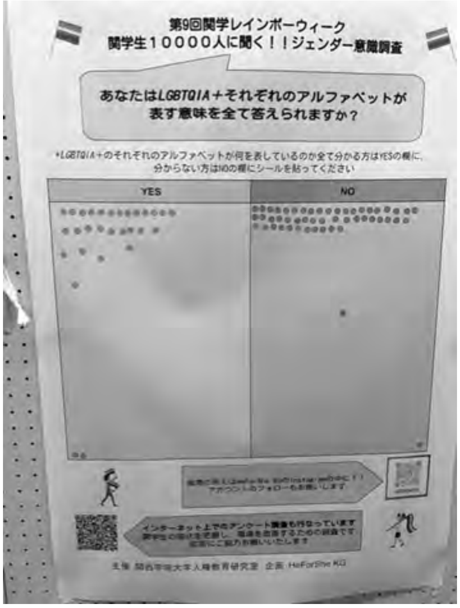
LGBTQIA+は200通りあると聞いたことがあります。レインボーに留まらない無限色で世界が染まればと願います。

友人からカミングアウトを受けた時、「もっと知ってほしいし何でも聞いて！」と言ってくれて嬉しかった！「聞く・話す」で全ての人が生きやすくなると思う。

授業で、個人の性的指向は不変のものではないと知りました。LGBTQIAを他人のことと考えるのではなく、自分にも当てはまることとして考え、知っていきたいと思いました。関学生全員が居心地のよいキャンパスになるといいなと思います。

(2) 関学生10000人に聞く!! ジェンダー意識調査

今年度のKGRWでは、関学内のジェンダー平等達成を目指して活動する学生団体「HeForShe KG」（https://www.instagram.com/heforshekg/）が主体となって2つのプログラムを実施した。まず1つ目の「関学生10000人に聞く!! ジェンダー意識調査」では、2つの調査を実施した。1つ目の調査は、3キャンパスで実施したパネル展において、以下の写真のように「あなたはLGBTQIA+のそれぞれのアルファベットが表す意味を全て答えられますか？」という問いに対して、「YES」または「NO」のどちらかに丸いステッカーを貼ってもらうというものであった。



この3キャンパスで実施した調査結果をまとめたのが以下の表1である。合計137名の方に回答いただいたが、LGBTQIA+のすべての文字の意味をしている人は、26.3％（137名中36名）にとどまったという結果になった。

表1:各キャンパスにおけるLGBTQIA+の認知度

	Yes	No	合計
西宮上ケ原キャンパス	３３	６４	９７
神戸三田キャンパス	1	8	9
西宮聖和キャンパス	2	２９	３１
合 計	３６	１０１	１３７

一方、Google Formを用いて実施したジェンダー意識調査（実施期間：2021年4月9日～5月21日）には、227名の方にご協力いただいた。「カミングアウトの意味を知っていましたか？」という設問に対しては、90.3％の人が「はい」と回答した。一方、「カミングアウトされたことはありますか？」という設問に関して「はい」と回答した人は、34.5％であった。「カミングアウトされたことがある」と回答した人を対象に、「その際にどのような対応をしましたか？」と自由記述で

回答してもらったところ（72 名）、「そうなんだ」というように、あまり大きなリアクションではなく普段の会話と同じように反応したり、「ありがとう」とお礼を言った人が多かった。また、なかには相手がカミングアウトしたことから自分も同じタイミングでカミングアウトしたという人も数名いた。これに対して、カミングアウトされた経験のない人に対して、「もし誰かにカミングアウトされた場合にどのような対応を取りたいと思いますか」という設問に自由回答で回答してもらったところ（133 名）、一番多く見られたのは「受け入れる」、「受け止める」、「そうなんだ」のように大げさにリアクションをしたり、以前と態度を変えるようなことはせず、今まで通りの関係を続けるという意見が多かった。また、「相手を尊重する」、「カミングアウトしてくれたことに対してありがとうと言う」など、相手を思いやる回答も多かった。一方、少数ではあったが、「驚いて言葉が出ない」という人や「普段通りの対応をするが心の中では驚くと思う」という人もいた。

「カミングアウトしたことがありますか？」という設問に対して「はい」と回答した人たち（43 人、20.2％）に対して、カミングアウトをしようと思ったきっかけ（理由）を自由回答で尋ねたところ、「自分のことをもっと知って欲しかったから」、「相手を信頼していたから」という理由が多かった。また、恋愛の話をしていた流れで、あるいは相手が先にカミングアウトしたから（自分も伝えた）などというように、話の流れでカミングアウトした人も複数いた。

「学生生活の中で SOGI ハラを受けたことはありますか？」という設問では、5.4％（12 人）が「はい」と回答しており、その内容として、中学や高校で同性のクラスメイトと仲良くしていると「レズかよ」とからかわれた、といった回答が複数みられた。

これに対して「SOGI ハラをしてしまった経験がありますか？」という設問では、7.2％（16 人）が「はい」と回答し、その内容としては「オカマ」、「オネエ」、「レズ」、「女々しい」、「ホモ」などといった言葉を周りの人に言ってしまったという回答がみられた。

最後に「学生生活の中で SOGI ハラを見たり聞いたりしたことはありますか？」という設問では、20.2％（45 人）が「はい」と回答し、その内容についても上記と同様「オカマ」、「オネエ」、「レズ」、「女々しい」、「ホモ」などといった言動や、男性に対して「女っぽい」、女性に対して「男っぽい」など、社会のジェンダー規範からはずれた外見や行動に対して SOGI ハラが起こっていることが明らかとなった。

（3）LGBTQ+ についてもっと知ろう！

HeForShe KG が主体となって実施した 2 つ目のプログラム「LGBTQ+ についてもっと知ろう！」では、以下の写真にあるように、「関学での取り組み」（赤色）、「LGBT を知ろう」（オレンジ色）、「メディアとジェンダー」（黄色）、「LGBT を取り巻く課題とは？」（緑色）、「LGBT だけじゃない」（青色）、「関学生の取組み」（紫色）というレインボーカラーの 6 枚のポスターを、KGRW の期間中、学内のさまざまな掲示版に掲示してジェンダーや SOGI に関する啓発を行った。

（4）LGBT 関係図書の展示

今年度も関学図書館の企画として、一昨年度までと同様に KGRW が始まる以前の 5 月 10 日から 5 月 28 日まで、西宮上ケ原キャンパスの図書館 1 階のミニ特集コーナーにおいて、LGBTQ 関連の書籍の展示をしていただいた。

（5）映画『ぼくが性別「ゼロ」に戻るとき』上映会＆ミニ解説

5 月 18 日（火）の 17 時 10 分から西宮上ケ原キャンパスの図書館の図書館ホールにおいて、X ジェンダー会員制自助サークル label X（https://ftxmtx-x-gender.com/）の副代表の諏訪崎龍氏をお招きし、性に違和感を持ち続けていた主人公の 9 年間を追ったドキュメンタリー映画『ぼくが性別「ゼロ」に戻るとき～空と木の実の 9 年間～』（84 分）の上映会と、諏訪崎氏による「性同一性障害（GID）を取り巻く現状と X ジェンダーについて」というミニ解説を実施した。緊急事態宣言が発令している中でも 11 名の参加者があり、以下のような感想が寄せられた。

現時点では言語化できない動揺があります。本日得たことをこれからの私、社会にいかします。特に印象深かったのは「グラデーション」というイメージでした。われわれ（多くの人は）何事も白黒つけたがるのかもしれません。もちろん定義をして建設的な議論をするために白黒つけるのは都合がいいのかもしれません。ですが、人間とはもっと複雑ですよね。この複雑性に多くの人が気付き、わからないことを恐れるのではなく、他者も己も複雑であると認識できれば世界は少しよくなるのかなと思った今日でした。

トランスジェンダーのことを知っていますが、X ジェンダーのことは知らなかったです。この映画を見てこのような人もいるのだと気付きました。自分らしく生きていくのがとてもすばらしいことだと思います。社会でまだ認められていないが将来もっと多くの人に知られたら理解も広がると思います。

映画と諏訪崎さんのお話により、トランスジェンダー、X ジェンダー、性同一性障害についてそれぞれ理解が深まりましたし、もっと知らなければならないとも思いました。学生も含め身近な当事者との信頼関係が築けるようにしたいと思います。また、戸籍変更、同性婚の問題について早く社会を変えていかなければと思いました。

（6）パネルディスカッション「当事者の座談会」

例年、関西学院大学非公認 LGBT サークル CASSIS に所属している現役生によって実施されてきたパネルディスカッション「当事者の座談会」であるが、今年度は現役生に加えて卒業生らにもパネリストとして登壇してもらい、2012 年 5 月 19 日（水）の 20 時から 22 時まで、オンラインにて開催した。現役生 1 名と卒業生 2 名がパネラーとして登壇したこのオンラインでのパネルディスカッションには、17 名の参加者（内、登壇者 3 名、

関係者3名）があった。

パネルディスカッションでは、登壇者の自己紹介、「セクシュアリティとは何か」をテーマとした短時間の講演、ライフストーリーや学生生活での体験談の共有、質疑応答のあったのち、ブレイクアウトルームにて登壇者と参加者が自由に質問や雑談をする時間が設けられた。事前に質問を募集したところ、カミングアウトに関連する質問が複数寄せられたこともあり、学生生活の体験談はカミングアウトの話題が中心となった。

登壇者のAさん（卒業生）は「トランスジェンダーであり、バイセクシュアル」、Bさん（卒業生）は「トランスジェンダーであり、恋愛感情と性的欲求があまり一致しないセクシュアリティ」、Cさん（現役生）は「Xジェンダー（ノンバイナリー）であり、Aセクシュアル、性的指向はクエスチョニング」である。

セクシュアリティに気づいたきっかけ

ライフストーリーとして、パネラーの3人が自らのセクシュアリティに気づいたきっかけを語った。

Aさんがトランスジェンダーであるという気づきは、幼稚園の劇がきっかけとなった。劇で「男の子」と「女の子」に分けられた際、いつも遊んでいた男の子たちと同じ場所に行こうとすると、先生から「そっち（男の子の列）じゃない」と言われ、自分がセクシュアルマイノリティであることに気づいたと言う。また、中学時代に女の子も好きになったことから、好きになる際に相手の性別は重視しないというセクシュアリティに気づいた。

Cさんも同じく幼稚園の劇がきっかけとなっている。キリストの生誕劇をするにあたり、男の子の役とされていた「兵士役」をしようとした際に周囲がざわついたことで自分の割り当てられた性別への違和感に気づいたと言う。なおXジェンダーというセクシュアリティについて言語化できたのは高校生になってからであった。

Bさんは小学生の頃に「おかま」と呼ばれたことがあったが、当時は自分のセクシュアリティには気づいていなかった。小学4・5年生になり第2次性徴の話を聞いたことで「自分は女の子になるの？」と絶望し、セクシュアルマイノリティであることに気づいたと言う。トランスジェンダーというセクシュアリティについて、言語化ができるようになったのは中学生ごろであった。

性的マイノリティに関する情報へのアクセス

在学生と卒業生が登壇したことで、それぞれの学生時代を比較すると情報へのアクセスの手段や容易さに差があることがわかった。

2012年に本学を卒業したAさんが中学生や高校生の時期にはスマホやSNSが普及しておらず、情報を得ることが難しい環境であった。図書館に同性愛が描かれた小説があり「自分に何か関係があるかも」と思ったが、司書のいるカウンターで借りることも、借りた履歴が残ることも嫌だと感じ、こっそり読んで過ごす中で「同性を好きになる人」がいることを知ったと言う。その後ホームページやブログが流行り、「同性愛」カテゴリーのブログを読んで過ごしていたが、共用のパソコンであったため親に見られることを恐れ、検索ワードや履歴を毎回削除する日々であった。

2020年に大学院を卒業したBさんは、第2次性徴によって自分が女の子になることに絶望し、第2次性徴を止める方法を調べる中で「性同一性障害/トランスジェンダー」という言葉にたどり着いた。高校生時はブログをしており、自分の住む県の人を探して「胸を取るための情報」を集めていた。制服について学校と交渉して嫌な目にあった人や、結果として学校を辞めたというマイナスの情報が載っているブログもあったと言う。直接会うことはなかったものの、ブログを介して情報を集めることができていた。

現在4回生のCさんに関しては、Cさんが中学生の頃にはTwitter（SNS）が流行っており、Cさん自身がネットを使い始めた頃には「LGBT+」

という言葉が一般に広く知られ始めていた。「性同一性障害」についての話題もテレビで目にするようになっていたため、すぐに検索ワードを入れることもでき、性的マイノリティに関する情報を集めることができた。高校生時はネット上で見つけたLGBTコミュニティに参加もしていたと言う。

わずかな世代間の差にもかかわらず、インターネットの普及度合いやLGBTに関する情報の周知度合いによって、性的マイノリティに関する情報へのアクセスに大きな違いが見られた。

カミングアウトの経験談：Aさん

Aさんは20歳までカミングアウトをせず過ごしてきた。大学入学後、Aさんの望む服装や外見で生活することができていたが、就職活動によって「女子」の枠にはめられること、すなわち性別規範を押し付けられることに疲れ、カミングアウトすることを選んだ。「本来思っている自分で生きていくのとどちらが幸せか」を考えた結果であった。カミングアウトした友達たちからは「AはAだね」と受け入れられたが、母親にカミングアウトした当初は「聞かなかったことにする」という対応をされている。「勘当されるかも」と初めは怯えていたAさんだが、4～5年間をかけ、LGBT関連の本や新聞記事を実家に置いていったり、セクシュアルマイノリティの友人たちとの話を積極的に話すなどを通じて、現在では「家族も理解しようとしてくれるようになった」と感じている。初めのカミングアウトから10年が経った頃、「どう接して良いかわからんかった」と母から打ち明けられたと言う。

Aさんはカミングアウトについて「シスジェンダーやヘテロセクシュアルが当たり前の存在として規範化されている中では、カミングアウトするという行為は常に怖くて心配なもの」と表現する。それでもカミングアウトを「関係性を作るためのもの」と捉えるのであれば、同じ人にも何度もカミングアウトし、自分が何に困り、どんな希望があるのかを時間をかけて知ってもらうことも大切だと思う、と説明した。

Bさん

中学生の頃丸刈りにしていたBさんは、カミングアウトをしていなかったものの「みんななんとなくセクシュアリティに気づいていたのではないか」と考えている。当時の学校はセクシュアリティ以外のマイノリティの生徒が存在していたため、同質的な環境ではなかったと振り返る。

なお、大学入学後はカミングアウトを全くせず過ごしていた。言語の授業の中で、1人の先生が男性としてBさんを扱い、もう1人の先生が「SHE/HER」といった代名詞を使い女性としてBさんを扱ったため、同じ授業を受けている人たちから「あいつなんだ？」と奇異な眼で見られることとなった。しかしカミングアウトに苦手意識を感じていたBさんは、そうした出来事があっても周囲にカミングアウトをせずに過ごしていた。

親へのカミングアウトはBさんが中学生か高校生の頃に行ったが、お互いに大号泣し、その後もBさんのセクシュアリティをめぐり喧嘩になることがあった。現在、親は「Bさんとうまくいっている」と感じているようだが、Bさんにとってはその時のわだかまりがあるままだと言う。

Cさん

Cさんは、大学生活においては、良い意味でカミングアウトをするメリットが感じられない環境だと感じている。したがって、通称名の使用など、自分の要望を通したい時にだけカミングアウトしている。一番しんどかった思い出として語られたのが、大学1年の頃の親へのカミングアウトである。「女性はレディースを着るもの」という意識が強い母親は、身長の問題もありレディースを着ないCさんへのフラストレーションが溜まり、「言うまで帰らせない」と半暴力的な形でCさんを軟禁した。なお、父親はりゅうちぇるがテレビに出た際、「自分の息子がこんなんやったらぶん殴

る」と発言していたため、C さんは「絶対にカミングアウトしない」と思っていた。

軟禁を受けたC さんは無理やりカミングアウトをさせられたが、父親は「なんのことかよくわかっていないような反応」で、母親は「すっきりした」というような様子であった。しかし軟禁を受けたことや、その軟禁の時期がC さんの所属する劇団の旗揚げ公演の直前だったこともあり、C さんからすると今後も親と積極的にセクシュアリティについて話したいとは思えない関係だと感じている。こうした記憶があるため、現在は「自分に利がない限りはカミングアウトをしない」と説明したC さんは、「心に傷がつくので、そう言うのは絶対しないでね」と呼びかけた。

A さんの事例では何度でもカミングアウトし続けることで、初めは肯定的でなかった相手から理解を示される可能性があることが示された一方で、B さん、C さんの事例からは、カミングアウトを受けた側が清算できたと思っている「過去のカミングアウトへの対応」が、本人にとっては何年経ったとしても不信や不満といった「わだかまり」や「心の傷」として残り、自ら話したいという気持ちを奪っている可能性のあることが示された。

学生生活のセクシュアリティにまつわる思い出

中学生や高校生の時期にSNS がなく、情報を得ることが難しかったA さんは、制服に関する要望を学校に出せるとは知らず、「履かないと仕方ない」と思い渋々スカートを履いて過ごしていた。また、胸が出てくることを嫌だと感じ、筋肉をつけるために運動が苦手だが運動部に入っていたと言う。「今もし中高時代に戻れたら文化部したい。性別を気にせず部活をしたかったよ～」とA さんは語った。

B さんの中学校ではセーラー服とブレザーを選べたためスラックスが制服の選択肢にあったが、時代によってどちらの制服を着るかといった流行があり、B さんの時代はみんながセーラー服であったためB さんも親から言われてセーラー服を着ていた。B さんは「選択肢があっても選べないことがある」と語る。また、丸刈りにして過ごしていたことから登下校時に小学生から「あの人、男？女？どっち？！」などと言われ、学校への行き帰りだけでストレスがたまる生活であった。大学では、体育の授業を選んだため体力測定を女子として測ったり、トイレで服を着替えたりする生活をしていた。

C さんはなんとなく服装について違和感を覚え始めた高校時代が私服で過ごせる学校であり、体操服も学年別に別れているだけで、服装に関して性別で分けられることがなかったためのびのびと生活できていたと言う。セクシュアリティに関して同じような境遇の生徒が存在し、その生徒が先生にトイレのことなどを相談しているのを見聞きしていた。大学に入ってからは恋愛の話ばかりする周囲の環境に馴染めず、カウンセリングを受けたことで当事者サークルにつながったと言う。

参加者へのメッセージ

参加者からの質問への答えや参加者へのメッセージとして、カミングアウトを受ける側へのメッセージや他大学への思いが話された。

カミングアウトについての質問への回答として、カミングアウトの意向やカミングアウトするタイミングは人それぞれであることから、「カミングアウトされないからといって友だちでないというわけではない」ことが説明された。また、カミングアウトをされた場合、「偏見はないよ」、「理解があるよ」と口で言うだけではなく、その人と本当に友達になりたいのであれば、気持ちよく一緒に過ごしていくために「知っておく必要のあること」を知っていくための努力が必要であるという意見があった。

参加者や他大学へのメッセージとして、「関学がもっとよくなったらいいなと思う」と語られた一方で、「関学だけじゃなく他の大学もいろんな取り組みをしてほしい」と言う声が聞かれた。こ

れは「レインボーウィークがあるから、CASSISがあるから関学を選ぶ」と言うのも本当はおかしいのではないかという指摘であり、「どこの大学でも安心して過ごせるような環境になってほしい」というメッセージであった。

(7) 交流会

性的マイノリティの当事者、もしくは当事者かもしれない学生たちを対象とし、互いに交流することを目的とした交流会は、昨年度に続き、今年度もオンラインで5月20日（木）の20時から23時頃まで開催した。

(8) 映画『カランコエの花』上映会

LGBTが抱える問題を当事者ではなく周囲の人々の目線から描く映画『カランコエの花』のオンライン上映会には、33名の事前申し込みがあり、5月20日（木）から22日（土）の間に視聴された。視聴者からは以下のような感想が寄せられた。

私は今回の映画を見て、いかに人間一人一人が自分のものの見方で世界を見ているか、ということを改めて認識しました。マイノリティを排除する背景には本当に沢山の原因があると思います。例えば、マジョリティに制度を合した方が都合がよい、合理的である、という意見。また、自分とは大きく違う存在に対する恐怖感。カミングアウト出来ない背景には共同体からはじかれることの恐怖などがあるのかもしれません。本当に沢山の原因がマイノリティ、マジョリティというものの見方を人々に強要していると思います。少し落ち着いて考えると全員が全く違う人間なのに。誰かを排除することは、自分が排除されてもおかしくないことを裏付けているのに。認識の偏りを気付かせる教育の意義の一つを再認しました。このような映画の感想から、私は、私たちが行うべき行動の一つは「世の中は知らない、分からないばかりである。自分の考えは凝り固まっているという認識をもって世界と触れる。そのうえでみんなが生きやすい社会（関係性とも言えるかもしれません）を作る方法を考えながら生きる」ということだと思います。カランコエの花言葉、「本当のやさしさとは何か」をみんなが考えられると、より良い世界に近づくと思います。今回の映画で学んだことを生かしながらこの瞬間から生きなおそうと思います。

中高校で起こりうる話であったので、共感しやすかった。教え方についても改めて考えさせられた。間違ったら、むしろ犯人捜しのような感じになるかもという恐ろしさに気づいた。相手を理解する、受容するということは言葉だけではできないことなので、日常生活の中で常に考えたい。

とてもつらい気持ちが残りました。彼女にとって、クラスメートの心ない言葉より、親友たちのかばう言葉の方が何百倍も辛かったのではないかと思います。親友たちは彼女を思ってのつもりだった、しかし無意識の差別が最も凶器になるのだと感じました。何より、学校内で起こったことであり、教員のやり方のまずさに腹立たしさを感じました。もっとやり方があったと思います。教育機関にいるものとして、まずは自分自身が理解を深めること、知識を得ることの必要性を感じました。

(9) 公開シンポジウム「誰一人取り残さないために～ SDGsと多様性尊重の取り組み～」

KGRWでは、例年SOGIをテーマとした大学主催の人権問題講演会を開催してきたが、今年度は人権問題講演会の枠で公開シンポジウム「誰一人取り残さないために～ SDGsと多様性尊重の取り組み～」を5月21日（金）の13時から15時にかけて中央講堂で開催し、同時双方向およびオンデマンドでの配信を実施した。緊急事態宣言

中ということで会場での参加者は 15 名と少数であったものの、同時双方向のオンライン配信では約 120 名の方に視聴いただいた。関西学院では 2020 年 4 月に発表した「インクルーシブ・コミュニティ実現のための基本方針と行動指針」（https://ef.kwansei.ac.jp/efforts/inclusive）を記念して昨年度中にシンポジウムを開催する予定であったが、新型コロナウイルスの影響で開催できず、1 年遅れでの開催となった。このシンポジウムの概要は、人権教育研究室の HP（https://www.kwansei.ac.jp/r_human/symposium.html）および広報室の HP（https://www.kwansei.ac.jp/news/detail/4338）で公開されており、全文をまとめた冊子も今年度内に発行する予定である。シンポジウムの参加者からは以下のような感想をいただいた。

多様性社会における専門家の方々のお話を聞けたことは貴重な体験となりました。このような機会を設けていただきありがとうございます。障害者の方々をビジネス目線でポジティブに捉え、価値になるというご意見は大変興味深く感じました。多様性、マイノリティにおける知識を持ったうえで、当事者意識、共感力を身につけたいと考えます。そのために、まずはユニバーサルマナー検定を受験します。そして、今回のお話をもとに、現代における私自身のあり方を考えてみます。

授業の一環で軽い気持ちで聞きに来た講演ですが、とても自分の考えを見直す良い機会になりました。特に垣内先生のお話がとても分かりやすかったです。障害者や SOGI などマイノリティの方にとってはまだ日本は外出しやすさに欠けるところがあると知りました。またダイバーシティの必要性にも気付かされました。私もマイノリティに対する意識を変えていかなければならないと感じました。

パネリストの方々の話は非常に参考になりました。人間福祉学部で実施しているユニバーサルマナー検定の意義もよく伝わってきました。日本はバリアフリーが遅れているという先入観が誤っていたことにも気づきました。同時に、最も大切なのは人々の意識の変容であり、そのために何が必要なのかを改めて考える機会になりました。

本学での取り組みに始まり、外部の方々のお話を聞けたことで多様性に対する関心が更に高まった。また、多様性に対する検討が SDGs とも関連付けられている点が非常に興味深く、垣内さんが仰っていたように社会的少数者に対する配慮がビジネスチャンスにも繋がり得るというのは大変印象的であった。多角的な視点から考えることの重要性を改めて実感し、今後の学びにも活かしていきたいと感じた。

（10）多様な性を祝う集い－ともに祈る

KGRW のフィナーレを飾る「多様な性を祝う集い－ともに祈る」は 5 月 21 日（金）の 17 時 20 分から 18 時 20 分にかけて、ランバス記念礼拝堂で 2 年ぶりの開催となり、オンラインで中継された。やはり新型コロナウイルスの影響もあり、マスクをつけての礼拝堂での参加者はごく少数であったが、宗教センターから機材面でのサポートを受け、オンライン参加者と礼拝堂参加者との双方向コミュニケーションスタイルを導入することで、学外・国外からの参加者にも、配信されるプログラムの受動的な視聴者としてだけでなく、プログラムの積極的な担い手となる道を開くことができた。宗教センターの機材面のサポートに感謝したい。

学生オルガニストのパイプオルガンの演奏ではじまった集いでは、セクシュアリティの多様さを大切にすることをさまざまな表現でともに祈った。「らしさ」を押しつけられている一人ひとりの人間が「わたしはわたし。神さまが私をこのように造ったのだから」と宣言する賛美歌『主につ

くられたわたし』（平良愛香牧師作）を、歌う代わりに朗誦し、続いて性的マイノリティがテーマの絵本『みんな　すっごく　いいね！』（ながえはるき＆はれまちゆきの作）の本文に参加者みんなで「いいね！」コールをした。またレインボーウィークの期間中に Google Form を通じて募集していたメッセージを、オンライン参加者に祈りの言葉として朗読してもらい、礼拝堂参加者とわかちあった。プログラムの最後には黙想のあと、礼拝堂・オンライン両参加者の想いを記した短冊に彩られたレインボーカラーの風船が Amazing Grace のオルガン演奏のもと、礼拝堂の天井に向かいゆっくりと舞い上がり、今年度の KGRW のすべてのプログラムが終了した。

なお、参加者から以下のような感想をいただいた。

楽しいイベントをありがとうございました。

多様な性、自分らしく生きることを考えることができた時間でした｡ありがとうございました。

卒業してからでも、離れたところからでもランバスでお祈りできたことをとても嬉しく思います。感謝いたします。zoom と現場の手配は大変だったかと思いますが、おかげさまで関学でお祈りしていたあの時を思い出すことができました。zoom だと自分の声が会場に届くまで時差があり、それが会場の人を混乱させていないかな？と少し不安に思いました。また zoom で参加できるのであればぜひしたいですし、卒業生の中にもきっと参加されたい方がいると思うので、校外にもっと広めて行かれてもいいんじゃないかなと思いました。

２． 2021 年度の多様性尊重に関する取り組み

学校法人関西学院における 2021 年度の多様性尊重に関する取り組みの大きな前進は、第 1 回のインクルーシブ・コミュニティ推進協議会を開催したことであろう。2020 年 4 月に発表した「インクルーシブ・コミュニティ実現のための基本方針と行動指針」の中で、基本方針の中の「１．インクルーシブ・コミュニティ推進施策を着実に実施するために」の中で、この推進協議会の役割は以下のように記されている。

①学院内外の多様性尊重に関する情報を収集・調査し、多様性尊重に向けて広報･啓発活動、教育等を行う。
②多様性の尊重に関する学問・研究の推進を図る。
③学院の構成員として学生や生徒等の参加協力を重視し、インクルーシブ・コミュニティ推進に関する発言、参画の機会を保障する。
④上記①～③を実施するために、学院のインクルーシブ・コミュニティ促進を統括する組織として、学院の責任のもとに「インクルーシブ・コミュニティ推進協議会」（以下、推進協議会）を設置する。
⑤推進協議会は、大学、短期大学、高等部、中学部、初等部、幼稚園、千里国際高等部・中等部、大阪インターナショナルスクールの各学校と学院のダイバーシティ推進本部、ハラスメント相談センター、大学の組織である総合支援センター、人権教育研究室など学院内関係部局と連携し、多様性の尊重に向けて協働する。
⑥推進協議会は､インクルーシブ･コミュニティ実現の推進状況や効果について分析評価し、その結果を学院内外に示すとともに、学院内関係部局にフィードバックして現状の改善を促す。

また、この推進協議会の構成図は以下のようになっている。

2021 年 9 月 11 日に、短期大学長、高等部長、中学部長、初等部長、幼稚園長、ダイバーシティ推進本部長、ハラスメント相談センター長、大学の組織である総合支援センター長、人権教育研究室長が出席して開催された第 1 回のインクルーシブ・コミュニティ推進協議会では、協議会の位置づけの確認とともに、改めて「インクルーシブ・コミュニティ実現のための基本方針と行動指針」の内容が確認された。そして、この行動指針の各学校で周知方法について計画づくりを 11 月末までに行い、その成果を 2022 年 3 月に開催予定の第 2 回推進協議会で共有することとなった。

大学に限定した取り組みとしては、在学生や受験生に対して大学 HP に多様なセクシュアリティの尊重に関連する活動の情報提供のために、「関学レインボーウィーク」、「LGBTQ+ 卒業生のライフストーリー集」、「大学非公認 LGBT サークル cassis のツイッター」などへのリンクをはった「『LGBTQ+』『SOGI』尊重への取り組み」（https://www.kwansei.ac.jp/about/lgbt/）というページを作成した。また、キャリアセンターでは LGBTQ + の学生たちの就活支援の準備のために職員に対する SOGI 研修を実施したり、社会学研究科では教員向けの「学生の多様性に配慮した教育・研究環境の実現に向けてのガイドライン：セクシュアルマイノリティ学生への配慮・対応を中心に」という冊子の作成や関連する研修会の開催を行ったり、人間福祉学部・人間福祉研究科でも社会学研究科の取り組みを見習って「人間福祉学部・人間福祉研究科：SOGI（性的指向および性自認）の多様性への配慮・対応に関するガイドライン」の制定や関連する研修会の開催を行った。今後は、こうした各部署での対応から全学的なガイドラインの制定や研修会の開催が求められる。

2022 年度には関学レインボーウィークは 10 周年を迎える。来年の記念すべき関学レインボーウィークではこの 10 年の取り組みを振り返り、インクルーシブ・コミュニティ実現のために今後の新たなる展開の第一歩を踏み出す、そんな一年になることを願っている。